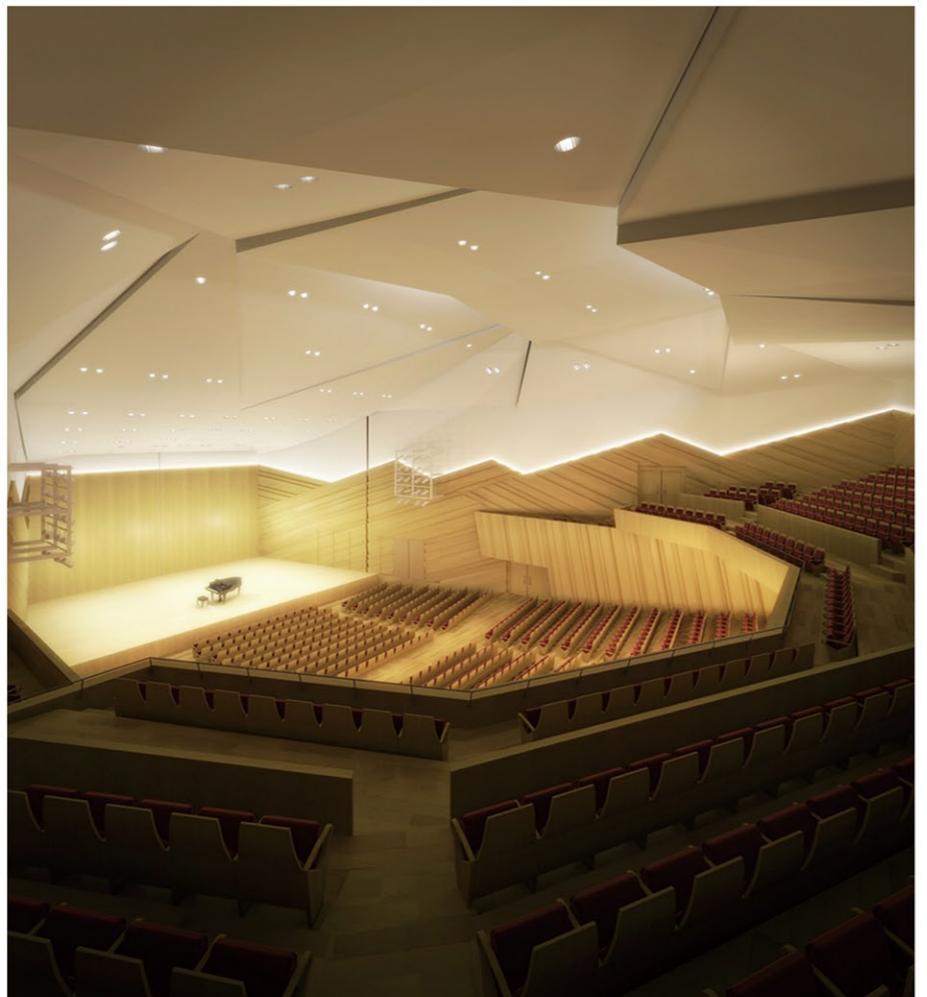


レンダラーズトーク インタビュー

JARA会員をピックアップしてのインタビュー。

今回は“フルレンダリングCG”のスキルアップに余念のない松谷一樹さんに迫ります。

建築もCGも写真も絵もまんべんなく 好きだからこそ出来ることがある



JARA2013出品作品「N-project」松谷一樹

まず、現在のお仕事についてご説明下さい。

松谷：NAU建築デザインスタジオ（以下NAU）で主にアトリエ系の建築事務所や組織設計のパースやアニメーション、インテリア系事務所のパースを主に描いています。

この仕事に興味をもったきっかけとNAUに入った経緯を教えて下さい。

松谷：大学で建築を勉強する中でプレゼンテーションすることの大切さを感じ、設計する側ではなく、設計したものを素敵に伝える側になりたいと思うようになりました。



松谷一樹 まつやかずき
有限会社NAU建築デザインスタジオ
2011年 東洋大学ライフデザイン学部
人間環境デザイン学科卒業
2011年 有限会社NAU建築デザイン入社
現在に至る

表現しないと伝わらないんだと感じるようになり、建築を「伝える」部分に興味を持つようになりました。そんな中、大学で非常勤講師として教えていたNAU建築デザインスタジオ代表の浅古と出会い、学生のときに仕事をお手伝いをさせてもらったのがきっかけで大学卒業後に現職となりました。建築もCGも写真も絵も、それぞれを凄く好きな人には劣るかとは思いますが、まんべんなく好きだったからこそこの仕事に興味をもったんだと思います。

松谷さんの仕事の進め方はどんな感じでしょうか。

松谷：図面を頂いてモデリングをしたあとに、グレースケールのマテリアルの状態でアングルの確認をさせて頂いています。その後ライティングを進め、絵の調子をみながらBUMPやリフレクションだけ当てて調整していく、という流れをとっています。色を入れる前の明暗の情報でどれだけ詰められるかでパースの良し悪しが変わるので、その工程にかなり気をつかっています。その後素材の色味やテクスチャーを与えて、設計者とやり取りをさせて頂きながら修正しながらフィニッシュまでもっていきます。レタッチでは明るさの調整とレンダーマスクをつかっての被写界深度の調整、点景入れ、などを行います。

印象に残っている仕事を教えて下さい。

松谷：JARA2013に出展させていただいたパースを描いた仕事が印象に残っています。出展したもののはブラッシュアップしたものなのですが、納期までスピードとクオリティの両立が出

来たと思うパースだったので達成感がありました。仕事の合間にCGで写真の模写をしているのですが、その成果が仕事でのスピードに活きたなと感じることができたパースです。



写真を模写した習作CG 松谷一樹

松谷さんの、パースやアニメーションをつくるにあたってのポリシーなどを教えて下さい。

松谷：出来るだけひとつのCGソフトウェアで作業をするところでしょうか。

CGならではの繊細な陰影だったり、光のまわり方を大切にしたいと思っています。それと他のソフトで修正を少なくすることで、その部分がノイズとなって本当に伝えたい箇所に目がいかなくなることを避けたい、という狙いもあります。

スピードとクオリティとミスを少なくする、というのは一体だと思っています。

スピードを上げるためにには出来るだけ単純なやり方をする。そうすると自ずとミスの数も減り、トライアル＆エラーの数が増やせるからクオリティが上がる。

そういった意味でも一つのソフトウェアでやれることはやってしまうのはスマートなやり方だと感じています。

最近気を付いていることや仕事のヒントにしてることなどはありますか？

松谷：趣味でよく西洋絵画を見に行くのですが、そのことが今パース描いている中で活きていると思います。仕事を始めてすぐにレンブラントの展覧会を

見て明暗の表現に感動したのをきっかけに、様々な展覧会に行くようになりました。また父親の趣味が油絵で、画集をたくさん持っていたのでよく見るようになりました。西洋の絵画史を見ていくと、時代の移り変わりによって、絵を描く主題が変化しているのが分かります。そして、その主題をより表現する為に、道具や技法、構図、彩色の変化が見受けられます。その部分に興味があり、建築パースにも同じことが言えたり、新しい可能性を見つける手がかりになるのではと考えています。

例えばコローの絵を見たときは、コローの描く自然の銀色の空気感が素敵で、自分の仕事にも取り入れることが出来るのではないかと考えたりします。また、エルグレコの「無原罪のお宿り」という教会のトップライトの下に描かれた絵があるのですが、それは下から眺めることが前提であえてパースを少し歪ませて描かれていたり、実際のトップライトの光を絵の演出として使っていたりします。展覧会に行くと何かしら再確認することや我々の仕事に活かせそうな発見があります。そういうことはプレゼンボードでのパースの使われ方などにも共通するところがあると思うので、もっと設計者の方とコミュニケーションをとりながら活かしていけたらと考えています。



カミュー・コロー「ヴィル・ダヴレー」

他にも、海外のパースはバロックやロマン主義の絵画の見せ方に似てるなどとか、今の建築パースは新古典主義のアングルの絵画に似てるなど感じています。例えば、主觀ですが具象的で素材感も凄く出ていて、絵としての構図などの基本的な部分はしっかりしている一方、ディテールにおいては背骨の数などといった部分はデフォルメしてあえて増やしてあり、その「くびれ」を美しく見せたりするといったことでしょうか。

そのようなことを考えたりすると、絵画の歴史の中に使えそうな表現がまだまだ眠っている

気がしています。因みに今年のJARA作品展のポスターなどのデザインを担当させて頂いたのですが、メインカラーで使っている色は、デザインを作っている時期に見たある唯美主義の絵の色がきれいだったので似た色を使うことに決めました。

これからやりたいことは？

松谷：やりたいこと、学ばないといけないことがばかりなのですが、もっと表現の幅を広げたいと思っています。建築の素敵なかたをより良く伝えるためには、それにあった表現があると思うので、自分の引き出しを大きくしていきたいです。その一環として手描きのパースも練習しています。

表現の幅が大きくなれば、こちらからも設計者に「こんな感じはどうですか」と提案出来るようになるのではと思っています。

JARAに入った経緯をお聞かせ下さい。

松谷：インターネットで「JARA2012」のことを知り作品展を見にいったのきっかけでした。たくさんのパースを見るなかで、建築を伝えるための光の使い方や雲の入れ方といった表現に大きな刺激を受けました。

いつか自分も出展してみたい、このようなパースを描いている方々に会ってみたい、と思っていました。

その後JARA会員の方とお会いする機会があり、お誘い頂きそのまま勢いで入ってしまったという感じです（笑）。

これからのJARAについて

JARAに入って良かったと思うことは、たくさんのレンダラーと出会い、たくさんの言葉を聞くことができたことです。

ただJARA会員内でもまだお会いしたことのない人も多いと思うので、そういった方々とも出会える場があるといいと思います。

また、JARA会員でない人たちの中にも素敵なレンダラーがたくさんいますし、建築を学んでいる学生にも、パースを描くことは楽しく、また建築を考える上でも大切なことだということを知ってもらいたいと思っています。

そういった人たちにJARAを知つもらうためにも、さらに積極的に発信していくことが大切ではないでしょうか。

貴重なお話をありがとうございました。